

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：24501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770027

研究課題名（和文）日本イスラム教団の布教活動とその日本イスラーム受容史における位置づけ

研究課題名（英文）Activities of the Japan Islamic Congress and their place within the history of Japanese reception of Islam

研究代表者

小布施 祈恵子 (Obuse, Kieko)

神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員

研究者番号：90719270

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では1970年代に独自の布教方法によって多数の日本人信者を獲得されたとされる日本イスラム教団の活動内容を解明し、日本イスラーム受容史における同教団の活動の位置を検討した。その結果、同教団の活動にはイスラームの土着化・日本化と呼べる要素も見られるものの、教団設立者が「大先生」と呼ばれ「癒し」の役割を担っていたこと、教団が集団入信式など大規模な儀式を重視していたこと、ムスリムであることより教団への帰属意識が強調されていたことなどの点からむしろ同教団は「新宗教」として位置づけることができるのではないかと結論に至った。

研究成果の概要（英文）：The aim of the present project has been to investigate the activities of the Japan Islamic Congress, which is said to have enjoyed a huge membership in the 1970s through unusual missionary strategies, and to situate it within the history of Japanese reception of Islam. It has been concluded that, while its activities can partially be characterized as an attempt to indigenize Islam in Japanese contexts, the group can be better understood as a new religion. Major factors behind this conclusion include: its founder, called 'Great Master' by his followers, assumed the role of a healer; the group focused on organizing large-scale rituals such as mass-conversion ceremonies; and the group membership was more emphasized than being a Muslim.

研究分野：宗教学

キーワード：日本におけるイスラーム受容 日本イスラム教団 イスラーム布教（ダアワ） 日本人ムスリム 土着化 改宗 新宗教

1. 研究開始当初の背景

日本にムスリム(イスラム教徒)が少なからず存在するという事は、近年全国でモスクが急増していることなどを通して知られつつあるが、日本におけるイスラム実践に関する学術的研究はまだ少ない。本研究開始時点での研究はパキスタン人による中古車産業やハラール食品産業のネットワークおよび各地のモスクの活動など、日本在住の外国人ムスリムに関するものが中心であった。

また日本人ムスリムに関しても、外国人ムスリムと結婚した日本人女性のイスラム受容の過程に関するものを除けば、まとまった研究はほとんどない。最近増加しつつある(結婚を通してではなく)自らの宗教的意欲によって改宗した日本人ムスリムの活動・思想については、改宗者自身の手による著書しか情報源がないのが現状であった。

特に、日本人ムスリムが日本社会においてイスラムをどのように理解・実践しているのか、とりわけ彼らの布教(ダアワ)における日本宗教や伝統文化の扱いに関する知見は非常に限られている。中でも、1970年代に独自の布教方法を通してイスラムを日本人に受容しやすい形にすること(「日本化」あるいは「土着化」)によって(小村 2016; 小村 2015)多数の日本人改宗者を生んだとされる日本イスラム教団についての情報は、伝えられる規模の大きさに反してまだ極めて少なく、学術的研究も限られていた。このため本研究では日本イスラム教団の布教内容の特徴を分析し、その日本におけるイスラム受容史および日本宗教史における位置づけを検討することとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は大きくわけて以下の3点であった。

(1) 日本イスラム教団の設立・発展および衰退の経緯を解明し、教団の中心的人物による日本文化や宗教(特に仏教)への言及に注目しながら、「大乘イスラム」(安倍 1986)と呼ばれる教団独自の布教内容を明らかにし、その特徴を特定すること

(2) 現在日本国内で活動中である日本人ムスリムの日本イスラム教団に対する見解および彼らの布教活動における日本宗教や伝統文化の扱いを調査し、現代日本におけるイスラム土着化の試みの程度と内容を特定すること

(3) これらの調査結果をもとに、日本人のイスラム観、日本人改宗者のイスラム布教に対するスタンス、イスラムと日本宗教(とくに仏教)の交流および相互認識の歴史をふまえた上で、日本イスラム教団の活動を

日本におけるイスラム受容史および日本宗教史の中に位置づけること

3. 研究の方法

本研究では前項に挙げた目的を達成するための主な研究方法として、文献調査およびインタビューと参与観察に基づくフィールドワークを採用した。

日本イスラム教団に関する情報は現在日本国内に存在するムスリム・コミュニティの中心的人物および教団の元関係者に対するインタビューのほか、地方公共団体や図書館でのアーカイブ調査によって入手するという方法を取った。

具体的にはまず東京都内、特に日本イスラム教団の本拠地があった東京都新宿区内外のモスクやイスラム団体でインタビューを実施し、そこで同教団との関係があったまたは同教団に関する情報を持っていると判明した人物についても、本人との面会が可能である場合はインタビューを行った。またこれと傾向して、日本イスラム教団や同教団の関係者が出版した著作および1970年代から1980年代にかけて出版された日本のムスリム・コミュニティに関する出版物にもとづいて、日本イスラム教団の発展・衰退の経緯およびその布教内容の解明をはかった。

国内のムスリム・コミュニティにおけるイスラム布教活動の内容については、日本人ムスリムを中心に代表的な指導者へのインタビューおよび彼らの活動への参与観察を通して調査した。ここでの目的な大きくわけて以下の3点であった。

(1) 日本イスラム教団および教団関係者に関する情報を得ること

(2) 日本イスラム教団に対する調査対象者の評価を明らかにすること

(3) 対象者のイスラム布教に対するスタンス、およびそこにおける日本宗教・文化の扱いに関する情報を得ること

ここで日本イスラム教団に関係していたことが判明した対象者については、改めて詳細なインタビューを行った。また布教活動において日本宗教および文化への言及を広く行っていると判明した対象者については、対象者が属するモスクおよびコミュニティにてインタビューと布教活動の参与観察を行い、イスラム土着化の試みがどの程度、またどのように行われているのかを特定した。

4. 研究成果

(1) まず、現在国内で活動中の日本人ムス

リムの日本ムスリム教団に対する評価はおしなべて否定的であり、特に同教団について直接の知識を持っている比較的年配(50代から70代)の日本人ムスリムは、教団の意図や活動姿勢に強い疑念を抱いていることが多いことが判明した。具体的には教団の目的は金儲けであり、そのために中東・東南アジアのイスラーム諸国とのつながりを求めたのではないが、また教団の布教内容が本来のイスラームの教えから逸脱しており、日本にイスラームを根付かせる方法としては筋違いである、といった意見があがった。ただ後者についての具体的な指摘はあまりなく、政治的活動をも含む教団の大きかりな活動内容に対する違和感の表明が多かった。また、日本イスラーム教団の存在は、日本のイスラームの歴史における「恥」だと思っているので言及を避けているという声もあった。

また同教団の政治的・経済的活動に対してはその活動時期においても日本のムスリム・コミュニティにとどまらず、国内で相当の批判があったことが判明している。しかし教団が活動を停止してから30年以上が経過し、その存在を知るものが極めて少数になった今、当時を知る日本人ムスリムが同教団への言及を避けようとし、また同教団の活動が明らかになることによって自らが属する現在のムスリム・コミュニティへの評価に否定的な影響がおよぼされる可能性に非常に敏感であるということは、国内外のイスラーム関係の組織による活動によってムスリムとしての国内での自分たちの立ち場、および日本の一般社会におけるイスラーム観に大きな影響が出ることを彼らが常に警戒していることの反映であると考えられる。

さらに教団の活動当時の状況を知る日本人ムスリムからの疑念に対し、教団の中核的メンバーであった外国人ムスリムは、教団設立者である二木秀雄の意図は金儲けではなかったと主張し、教団の布教方法の正当性を強調した。ここでは、入信の際は信仰告白(シャハーダ、特に神を信じること)に重点がおかれるべきである一方、服装や食に関する規定は二次的なものであり、暫時的に実践してゆけばよいこと、そしてこのような布教方法は預言者ムハンマドのそれに通じるものであることが強調された。日本イスラーム教団を通じてイスラームに入信した人の数を特定することは難しく、教団側での水増しが指摘されることも多いが、入信過程のこのような簡素化は、教団が短期間で多くの信者を獲得することができた要因のひとつであると考えられる。

(2) 国内のムスリム・コミュニティの指導者による布教活動に関しては、日本におけるイスラームの土着化に向けて意欲的に取り組んでいる関東在住の日本人ムスリムの活

動を重点的に調査した。彼は自らの目指す「日本色のイスラーム」を発展させるにあたって、イスラームの土着化は正統四洋法学派の解釈に反さない範囲で、日本の伝統文化や社会的慣習を取り入れつつ行うべきだとしている。具体的には「イスラームに入信することは外国人になることではない」と主張し、イスラームの宗教歌(ナシード)を日本語に訳したもの、日本の唱歌にイスラームの教えを表現する歌詞をつけたもの、イスラームの教えを短歌の形にまとめたものなどを導入しつつ、日本語による布教活動を推進している。ただ彼による日本の伝統的価値観への言及の中にはイスラームの教えと矛盾しうるものも含まれており、従ってイスラームの教えに忠実であるとする試みと、日本文化を積極的に取り入れてイスラームを布教する試みの間には「創造的緊張関係」が存在すると言える。

またこの日本人ムスリムの活動とヨーロッパの改宗ムスリムによる布教活動との比較考察を通じて、この日本人ムスリムの取り組みに見られる特徴を次のように特定した。

この日本人ムスリムはヨーロッパの改宗ムスリムに比べて、理想とするイスラーム土着化の内容や程度に関してはるかに明確な考えを持っている。またそれを自らのブログやSNS上で発信しており、「イスラームの土着化」という概念は日本のムスリム・コミュニティの中で一定の認知度を持っていると考えられる。

彼は布教活動の一環として、日本のムスリム・コミュニティと一般社会をつなぐ役割を積極的に担っている。イスラームと自国という二つの世界の架け橋になり、自国におけるイスラーム理解を促進しようとするこのような傾向はヨーロッパの改宗ムスリムの間にも見られる傾向である。

ヨーロッパの改宗ムスリムは社会・政治問題に関して積極的に発言を行っているが、この日本人ムスリムにはまだそのような発言はみられない。

ヨーロッパの改宗ムスリムが移民ムスリムと距離を置き、彼らに対して批判的であるのに対し、この日本人ムスリムは公に日本への移民ムスリムを批判することはない。これは日本におけるムスリム・コミュニティがまだ小さいことが一因であろう。

さらにこの日本人ムスリムは日本イスラーム教団の活動当時の状況を直接知らない世代に属するが、自らのイスラーム土着化の試みを同教団の主張していた「大乘イスラーム」とは異なると明言し、そのスタンスを「日本教イスラーム派」と呼んで批判的に差異化

している。彼に限らず、一般的に日本イスラム教団について直接の知識を持たない世代は同教団に言及したり、同教団の活動内容について（推測・仄聞の範囲内だが）話すことをあまり躊躇しない傾向がある。従って日本イスラム教団に対する日本人ムスリムの姿勢には世代間の相違が存在すると言える。

（3）本研究では当初日本イスラム教団の布教活動の特徴を、教団幹部であった安倍治夫によって主張された「大乘イスラム」という概念に注目し、日本における仏教とイスラムの接点、および先行研究でも提示されたイスラムの土着化という観点から検討する予定であった。しかし同教団の教義解釈における特徴に加えて組織的特徴などを考慮すると、その活動はイスラムを日本化することによって日本に根付かせる試みとしてのみではなく、「新宗教」として理解することが可能ではないかという結論に達した。この根拠となる同教団の活動の特徴としては次の5つが挙げられる。

教団設立者であり、信者から「大先生」と呼ばれていた二木秀雄のカリスマ指導者としての存在

二木が教えを説くだけでなく、実際に医者として信者を「癒す」、いわば「ヒーラー」としての役割を担っていたこと

教団の名を冠したバッジやたすきの使用などに見られるように、ムスリムとしてより日本イスラム教団への帰属意識が強調されていたこと

集団入信式など、大規模な儀式が重要視されていたこと

基本的な教えはイスラムに即しているものの、その解釈や実践方法が伝統的なイスラムとは異なり、仏教など他の宗教要素を積極的に取り入れていること

日本イスラム教団を新宗教の一例であると特定するには同教団の出現の背景となる当時の日本社会の宗教情勢のより詳細な検討が必要であるが、同教団を新宗教ととらえることによって、その活動を戦後の日本宗教史の中により多角的に位置づけることができると思われる。

本項の（2）についてはアジアのムスリム・マイノリティに関する書籍の一章として論考を完成し、現在出版準備中である。また（3）については現在その内容を雑誌論文として発表準備中である。この2点は次項に述べる研究業績には反映されていない。

参考文献

安倍治夫、イスラム教、現代書館、1986年

小村明子、日本人のイスラム受容：日本イスラム教団と「大乘イスラム」について、宗教と現代がわかる本、平凡社、2016年、pp.150-155

小村明子、日本とイスラムが出会うとき：その歴史と可能性、現代書館、2015年

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

小布施祈恵子、仏教徒とムスリムの相互認識：日本仏教からの視座を中心に、2016年度研究報告書 龍谷大学仏教文化研究センター ワーキングペーパー、査読無、No.16-10、2017、pp.139-153

OBUSE Kieko, “Islam in Japan” Oxford Bibliographies in Islamic Studies, ed. Andrew Rippin, 査読有、2015（ページ番号なし）
<http://www.oxfordbibliographies.com/view/document/obo-9780195390155/obo-9780195390155-0167.xml>

〔学会発表〕（計4件）

小布施祈恵子、仏教徒とムスリムの相互認識：日本仏教からの視座を中心に（招待講演）国際シンポジウム 浄土真宗・キリスト教・イスラムにおける比較神学的対話、2017年2月15日、龍谷大学大宮学舎（京都府京都市）

OBUSE Kieko, “Towards a Japanese Islam: A Study of a Japanese Convert’s Attempt to Indigenise Islam”（招待講演）2016年6月28日、Oxford Centre for Mission Studies、オックスフォード（英国）

OBUSE Kieko, “Japan Islamic Congress: A Forgotten Episode in the History of Islam in Post-war Japan” 国際宗教史学会第21回世界大会、2015年8月24日、エアフルト（ドイツ）

OBUSE Kieko, “Buddhists and Muslims in Political Collaboration: Japanese Views of Islam during the War”（招待講演）、International Conference on Twenty-Five Years in Retrospect: Buddhism, Ethnic Conflicts and Religious Harmony in South and Southeast Asia, organised by International Centre for Ethnic Studies、2014年6月27日、キャンディー（スリランカ）

〔図書〕（計1件）

OBUSE Kieko, “Japan’s Political Collaborations with Muslims (1854-1945),” in

Ethnic Conflict in Buddhist Societies in South and Southeast Asia: The Politics behind Religious Rivalries, ed. K. M. de Silva, Vijitha Yapa, 2015, pp. 217-39

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小布施 祈恵子 (OBUSE, Kieko)

神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員

研究者番号 : 90719270